
厨二病

吉田淑子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二病

【コード】

N5061G

【作者名】

吉田淑子

【あらすじ】

なんでもない日常がゆっゆつで死にたくなってしまつので、海に自殺に行った。

癩の虫だよ、この子は。と、母や祖母や担任の教師に言われたので、私は虫なのだと思った。

どうせなら姿も虫であつたらよかつたのに。私は別にこの世に生まれてはなかつた。生まれるならせめて、すぐに死ぬ虫にでも生んでくれればよかつた。あの蝶のような母親からは、きつと虫だつて生まれる。

私は本当にろくでもない。頭も悪いしかつこも悪い。所有していて自慢になるようなことはひとつもない。早く死んでしまいたい。思考として明確に「死」というを意識していたわけではないのだけど、この世にいなかつたら、消えてしまえたら、とは漠然といつも思つていた。特に学校が終わると。学校は好き。人と話せるから。だつて家には誰もいない。家に連れて来るような友人もいない。狭い団地の片隅で、いつだつて他愛ない妄想ばかりしていた。その空想ばかりが私の親友だつた。

「寂しくないの？」母は言った。「友達もいなくて、学校の他は家でゴロゴロしてばかりで」私は何も言い返さなかつた。「誰がひとりに慣れさせたの。私の小さい頃からお留守番させたのはママでしょ」言い返さなかつた。別に言つてどうなるものでもない。母は帰つてくると大抵怒る。それは私がだらしなく部屋を散らかしているせいなのだが、片付ける気はなぜかさらさらない。反抗ではなく、単純に面倒なのと、やり方がわからないからだ。

私は何もわからない。顔の洗い方すら知らなかつた。以前、珍しく母と風呂に入ったとき、「顔は洗わないの」と聞かれ、なぜか怒られると思つた私は、慌てて「洗うよ」と言い、洗顔料のCMをまね石鹸を泡立てて頬をなでた。母は呆れて、「それはCMだけのやり方じゃない。顔全体を洗わなきゃ意味ないでしょ。馬鹿なの？」と

言った。「わたし教わったことないよ」、と言うのが恥ずかしくて泣いた。顔を洗うなんて当たり前のことが出来ない私。泣いていることに母は気付いただろうか。シャワーの音と水で、気付かなければいいなと思うけれど、気付いてないはずもないだろう。どうせ母には私が泣いた理由を察せないで、「また癩の虫か」と思うだけだ。

私には父親がいない。昔はいたような気がするのだけど、とりあえず今はいない。だから母は働いていて、家に寄りつかない。暮らし向きは裕福とは言えない。私は取り柄もないし、ちようどいい。取り柄があつたら習い事をしたくなるからお金が足りなくなるでしょ。絵を描くことや、歌を歌うことは好きだったけれど、どれも褒められたことがないので下手なのだろう。飽きっぽいし。本を読むことが唯一褒められた趣味だった。とはいえ、私の読む本なんて、決して褒められたものじゃない漫画みたいなものだ。単に周りが本を読まないだけだ。勉強や友達や家族とのお喋りに忙しくて。その点私は暇が有り余っていたから本くらい読むだろう。

私は中学生になっていた。頭は悪くて見た目も冴えず運動もできない。こんな私にもとりあえず学校で話してくれる、いわゆる友人みたいのはいた。もっとも、学校を出れば遊びもしないくらいの関係だったけれど、私にはそれでも嬉しかった。

「八島さん」

私はそう呼ばれていた。単なる名字だ。私は私の名前が大嫌いだからよかった。

放課後のちよつとした時間、たまにお喋りをするグループがいた。私の他には三人。

「知ってる？一組の永田くんと中島さんって付き合ってるんだって」
「そうなんだ」

「私も手をつないでるとこ見ちゃった。すごいよねー」

私はうなずいた。「すごい」、としか思えない。男の子と付き合っていてどんなこと？なにか楽しいことなのだろうか。私は男の子は嫌い。

「八島さんは好きな人いないの？」

「え？」

「私はね、川本くんが好きなんだ。八島さんは？」

周りも、きゃいきゃいと囃立てる。私はここで何かを言わないといけないと思った。

「……橋場くん」

出た名前がそれだった。

「えー、うちのクラスなの？」

「そう」

橋場くんは私のクラスの、明るい男の子だ。彼を好きな女の子はたくさんいるし、別に言っても構わないだろうと思ったのだ。さして好きなわけでもない。

「でも、言わないでね」

「どうして？言わないとダメだよ。告白しなきゃ伝わらないんだから」

「いいの。とにかく黙っててね」

その時、たまたま男子の集団が通り掛かって、その中に橋場くんがいた。

「はっしー！」

はっしーというのは彼のあだ名だ。

「なんだよ」

「あのねー、八島さんがはっしーのこと好きだった！」

私はゾツとした。どうして言うの。何も言えなかった。やがて、男子のグループから笑いが沸いた。

「ほら、好きだったさ」

「うわー。はっしーかわいそー」

「キモいんだけど」

それを聞いて友人がなぜか、「ごめんね」と男子に謝った。

私は取り立てて衝撃でもなかった。どうせそう言われる事は知っていた。ただ、友人の「気にする事ないよ」という言葉にまた癩の虫が泣いた。

言っておくが、この男子の中傷は、マンガや小説での、「好きだからからかう」のようなものではない。男の子らしい、明らかな侮蔑と嫌悪でしかない。私は母からすら中傷されて育ったので、そういう事には敏感だった。敏感だからこそ、他人のちよつとした不機嫌も感じ、怯えてしまう。それがかえって相手を不快にさせる。

こんな私は間違いなくかわいそうだと思う。貧乏に生まれ取り柄もなく醜い。しかし体にハンデがあるわけではない。私はこれが最下層だと思っている。醜く頭が悪い、これだけで糾弾されるには十二分なのだ。一応五体満足ではあるから遠慮もいらぬ。かわいそうだ。わけても、幼い道徳心のせいで、私がこの不条理に気付かなかった事がいちばんかわいそうだ。私はこの中傷にも糾弾にもすつかり慣れきって、取り立てて改善の努力も行わなかった。

家に帰っていつものようにマンガを読む。今日発売の少女誌。その中の読み切りマンガにこう書かれていた。『女の子はきれいになるよ』。主人公の女の子に、貴族のようなきれいな男の人が言ったセリフだ。なんて残酷なんだろう。『きれいになるよ』だなんて。残酷だ。あるはずのない夢を見せる事は。『年頃の女の子はみんなきれいになる』？ああばからしいなあ！不細工はあがいても不細工なのだ。私はなんだか愛していたマンガにすら裏切られた気がして、ビリビリ破って捨てた。お気に入りのマンガまで破ってしまった。まあいい。電話が掛かってきた。母だ。

「今コンビニなんだけど、ご飯何がいい？おにぎり？お弁当？」

「いらぬい」

「どうしたの」

「とにかくいらぬい！ー！」

「あつそ。はいはい」

電話が切れた。私はなんだかひどくイライラしてしまった。私は買っ
てもらったばかりの自転車をこいで、どこか遠くへ行こうと思っ
た。若くきれいな母には私はいらないし、友人にも私はいらないし、
男子にだって私はいらないのだ。ここにいてなんの意味がある？で
も行く当てもないけど。

私はとにかく水辺へ向かった。波の音や川のせせらぎを聞くと、妙
にすっとした気分になることを思い出したのだ。辺りは一面真っ暗
で私は楽しくなってきた。この暗闇では誰も私を気にすまい！私は
いつでも見られているような気がしていた。家に監視カメラがつい
ている気がしたし、帰り道も誰かがつけている気がした。そして私
の滑稽な姿を見てゲラゲラ笑っているのだ。しかしその視線もこの
暗闇ならば通用しない。私はいよいよ激しく自転車をこいだ。行き
着いたのは暗い暗い夜の海。私はいったいどうしたいのだろう。死
体になってもきつと私は醜いだろう。いつそ泡になつて消えてしま
いたい。カサカサと何かが動いた。恐らく小さな蟹だろう。

「私あんたになりたかつたなあ」

呟いた。その野生の生き物はとづくに姿を消していた。虫になりた
かった。蟹になりたかった。私以外だつたらなんにだつてなりたか
つた。「私だつて私がいやだよ。だから仲間にいれてよ」これはク
ラスの誰かに向けた言葉。「これから誰も好きにならないし、何も
好きにならない」好かれていないのだから当然だ。

思うに、もらえる愛情はジュースみたいなもので、人によってそれ
を受け入れるコップの大きさは違うのだろう。そしてそのコップは
子供の頃いかに親に愛されたかで変わってくるのだ。私のコップは
せいぜいがアーモンド大だ。それ以上の愛情は注ぐ必要がないとい
うことを、世間はわかっている。

海は生命の母だそうだ。この大きすぎるほどの彼女ならば私の命す
らも軽く受け流すことだろう。

じゃぶじゃぶと中に入っていく。冷たい。

ママへ。ママはきれいだからまたいい相手見つけて再婚してください。私のことは忘れてください。（言うまでもないか）

パパへ。パパは責任を持たなかったから嫌いです。

クラスメイトの皆さんへ。ごめんなさい。ちつとも溶け込めなくて、でも、ちよつとだけ死ね。くたばれ。最期だから包み隠さず言つときます。死ね。

中学生の、まして女の私から世間に対して言えることはこの程度だ。私の世間は狭い。狭いまま死ぬ。ゴボゴボ。ゴボゴボ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5061g/>

厨二病

2010年11月19日16時49分発行